

事を申しければ、其の由御耳に立ち、中村喜兵衛・多田權内を被指添、宿へつれ行き、九郎左衛門家の内に牢を作り被召籠しに、晝夜一人して高聲なる口説事、人の悪口など申し、或時は謡・小歌などにて、近所の父子兄弟ある者はきかれぬ事を申しけり。其の暮になり、寒中に着たる衣類を喰ひさきて、凍死をぞ致しける。常々親に不孝なる事言語に絶えたり。老母は明暮血の涙を流せしが、終に食物をとめて殺しける。かゝる悪逆の因果其身に報いけると、皆人にくみあへり。

○歩士澤田新八傳話

山本基庸の微妙公夜話録に云ふ。御徒衆之内澤田新八郎は、微妙公の御意に違候て閉門仰付け置かれたり。然るに御參勤被遊けるにより、小松より御發駕被成、金澤淺野屋に御旅宿。御立被遊、町端まで御越之處、大樋金くさり橋のあなたへ新八罷出で、田の際につくばひ罷在りける處、何れも、あれは御折檻人也、如何と存知候處に、程近く成り、御見付被遊候て、澤田新八めかと御意也。其通りのよし申上げゝるに、あれは閉門させ置きたり、何とて罷出候

哉、尋ねて參り候へと御意にて、御駕籠立つ。其段新八に相尋候へば、御在國中は御免可被成かと相待罷在候處、御免なく昨日御發駕被遊。若しくは金澤にても御免可被成かと奉存處、それも無御座、最早來年までは頼みもつきたり。此上は相果申方却つて増敷と奉存、自害可仕よりは御目通りへ罷出で、何れもに切殺されたるが御憤りも止み宜敷管と奉存、罷出居申すよし申上ぐるに付、其段申上げゝるに御聞被遊、一年閉門させても足のよわらぬやつじや。猿の皮の毛巾着をさげ申が、于今所持いたし候哉と尋候へと御意也。即ち尋ねけるに是に御座候よし、懷中より取出し相渡しけり。依つて御覽に入れけるに、是をさげて供致せと御意なりしゆゑ、直に江戸へ供奉いたし、御奉公申上げたり。微妙公はかやうに思切りたる事は、必ず御免被成事まゝ有之也。其節同じ御供仕る鹽江半左衛門咄承候。といへり。

○歩士高柳吉左衛門傳話

異本微妙公夜話録に云ふ。或時御徒衆の名前を書上候へと御意にて、組々より何れも書上げ候處に、高柳吉左衛門と

申す御徒衆を書きおとしたるか不書上候。前かた上り候には在之候て、御扣と御見合被遊候、何之御尋ねも無之、風と高柳吉左衛門をめせと御意なり。吉左衛門御次へ伺公す。高々と御意には、吉左衛門に可尋は、吉左衛門儀頭共に悪まるゝと見たり。今般名書中に不書上。不勝手に有之故か、頭共へ馳走無之ゆゑと思召候と御意也。時暫く有之、知行百石くれ候。屋敷は何方にて成りとも廣く望候へ。扱屋敷の廻り樹木をいかうつけて、出來たらば頭にそれを進物にせよ。わづかの知行にて調へては成るまじく候間、情を出して樹木を以て頼みたらば、何ぞの時が一番に書上ぐるであらう。然らば立身もするであらうと御意被遊よし。替りたる事にて侍に被仰付たりと、前田庄左衛門物語也と。

○歩士武部久左衛門傳話

三州志隄叢餘考に云ふ。寛永十五年戊寅、客冬十月より肥前島原にて天主徒起り、島原の古壘に據る。西州の大小諸侯銳攻すといへども、年を踰えて陥ちず。故に重ねて松平伊豆守等をして之を攻めしむ。因つて我が公より山崎小右

衛門を島原へ遣し、伊豆守の戰勞を問ふ。一説、世子より監察として持筒足輕堀江加左衛門、公より足輕武部久左衛門を副ふ。二月天草の城陥る。此の時武部久左衛門賊首一つを得て歸る。因つて百石を賜はり、徒歩隊とすと也。松雲夜話録には、齋藤又右衛門といふ者を世子より島原へ遣し、陣取・攻城の委曲を見せしむとありと。今按ずるに、武部久左衛門が事は、三壺記に、加州より山崎小右衛門被遣、御目付として堀江加左衛門、小松より武部久左衛門を被遣處、久左衛門は城中敗軍之時手に合ふ首一つ捕り、奉行所へ指上ぐ。小松にて御知行百石被下、御歩衆之内へ被召加也と。此の事菅家見聞集にも載せたり。堀樗庵の寛永南嶋變には、加賀利常卿より使命あり。一人は山崎小右衛門、一人は武部久左衛門、爲目附堀江嘉左衛門被遣ける處、何れも手に合ひて首一つ宛取る。皆打捨て歸る中にも、一人は松平伊豆守の本陣に訴へ、首帳につけて歸る。故に歸國の後加増被申付、夫々に品あり。と載せたり。註に云ふ。山崎小右衛門は大坂陣に手柄ある人也。大男にて肩の厚さ一尺二寸、二間柄の鎧を片手に遣ふ。異名をばか